

広瀬 敏通

NPO法人ホールアース研究所代表理事

エコツーリズムへの思い

エコツーリズムというキーワードに取り組み始めてから15年、当初、意欲的な実践者、研究者らと、議論と研究に没頭しながら自分たちなりのエコツアーをつくろうと海外に出向いて幾ヶ所ものプログラムを現地の人々と作ってきた。これが俺たちの考えるエコツアーだ！と言えるものを形にしてきたつもりだった。ところが、その実践から見えてきた新たなキーワードがなんと「マスのエコ化」だった。

1998年のエコツーリズム推進協議会設立時に私は「マスのエコ化」と「社会運動としてのエコツーリズム」を提案した。マスの対極として考えられてきたエコツーリズム以外に、マスに内包されたエコツーリズムが存在するという概念だ。これはマス全体をエコ化していく働きを担い、本来の観光にゆり戻していく力となる。もう一方の社会運動という概念は、規模と効果が小さなエコツーリズムにとって、産業的な動機だけでは社会化することが困難であり、むしろ、その目的は持続可能な社会をつくるために観光の領域が果たす役割を具現化していくことにある。ビジネス化＝新規産業化は目的ではなく、過程であるとした。これらの考えでは、それまでのエコツアーイメージだけではない、手配旅行や団体旅行の形態も含むために「味噌もくそも一緒」の危ういエコツーリズム観が作られるのではないかといった懸念もでた。しかし、意識的な少数者だけに開かれたピュアーなエコツアーだけでなく、多数者が少し負荷を抑える気づきを促すエコツアーと両方が有って、環境効果が生まれていき、結果的に環境意識を高めたエコツーリストの増大と観光総体のエコ化につながる。社会と私たちの意識は常に連動しており、社会の変化を自分のものとして捉えることで幅が広がる。ベターなことにベストを尽くすことがいま大事なのだと思う。

エコツーリズムが具体的な活動となって地域に根付いてきた今、観光の理想形や一般論を語る時代から、現実社会の仕組みにフィットしたエコツアーの在り方、各論が必要となってきた。この過程で、事業者同士や地域社会との摩擦、対立も目立つようになってきた。

『自分たちは良いことをやっている』という意識があるために自分以外の他者を受け入れられないケースも多い。エコツーリズムが社会化するためにはこの点を乗り越えて、他者との協働を積極的に生み出す意外にないだろう。ポジティブな課題はポジティブに取り組んでいきたい。